

Ⅱ. 地域総合研究センター特別調査・研究員(松本市地域づくりインターン)活動報告

1. 町会単位での住民主体の地域づくりに関する報告

～高齢化と宅地化が同時進行する波田地区を事例に～

松本市地域づくりインターン第4期生・波田地区担当 奥原 芳紀

1. はじめに

地域づくりインターンシップ戦略事業の4期生として、2018年度から松本市の波田地区担当として着任した。波田地区の現状と課題を検討するために、日本社会を取り巻く超少子高齢化と、長野県松本市のまちづくりに関して整理したい。

1-1 超少子高齢化社会の到来

「少子高齢化」が大きな社会問題として提起されてから久しい。高齢者の激増と出生率の低下により到来する超少子高齢化社会、そして人口減少社会。日本は世界各国の中で最も加速度的に進行している現状である。およそ100年後の2100年には、最悪の場合人口は3,000万人台にまで減少することが推計されており、この数値はほぼ明治時代の総人口に匹敵する。このような大きな人口構造の変化は、人類の歴史上類を見ないものであり、国家規模での社会システムの激変を免れない。将来的に一定割合の自治体が消滅する可能性も存在する。

実際に2043年には高齢化率が36.4%に達し、年間出生数は2018年現在の約4分の3になる。2015年から計算して20～64歳の働き手世代は1,818万8,000人も減少する。ちなみに、調査フィールドである長野県松本市においても当然、少子高齢化と人口減少の波が到来する。2040年時点の高齢化率は34.6%に達し、2015年から計算して総人口は3万2,702人も減少する見込みである。

少子高齢化が及ぼすものとしては、まず労働力の不足と各業種におけるサービスの低下が挙げられる。これには当然、行政・警察・消防・自衛官・医療・福祉も含まれる。そして社会保障制度における若年世代の負担が増大し、高齢者の孤立化というリスクを抱え、地域社会における自治会の担い手不足や空き家の増加なども懸念されている。

その中、日本政府としては、高齢化の進展に対応して生涯現役を前提にした社会経済システム「生涯現役社会」「健康長寿社会」の構築に取り組む方針である。誰もが健康で長生きできることを望めば、社

会は必然的に高齢化する。その観点からすれば、高齢化社会とは「理想の社会」ではないだろうか。平均寿命が延びた分、心身が健康であるならば、定年を迎えたとしても再就職やボランティアなどの社会貢献などにより、社会の中で役割を担い、活躍して頂けるのではないだろうか。一般的に65歳以上であるとされている「高齢者」の基準も、75歳以上、85歳以上と上げていくことで、数値上は「少子高齢化社会」から脱却できる。以上の考え方から、介護予防や健康増進、ICTの活用などにより、与えられた時間を楽しく健康に生きながら、誰もが尊厳のある生き方ができる社会の仕組みづくりを目指している。

1-2 松本市の目指す地域づくりの方針

松本市は将来の都市像として「健康寿命延伸都市・松本」の創造を宣言し、「松本市総合計画基本構想2020」の第10次基本計画を平成28年に策定した。この「健康寿命延伸都市・松本」の目指すものは、単に体の健康づくりにとどまらない総合的なまちづくりであり、具体的には「人」「生活」「地域」「環境」「経済」「教育・文化」の6つの領域における、「人と社会の健康づくり」を目標としている。

また、その実現に向けた個別計画の地域における基盤として、多様な主体の協働による地域づくりの仕組みを構築する「第2次松本市地域づくり実行計画」を同年5月に策定。平成24年策定の「松本市地域づくり実行計画」において、「松本らしい地域づくり」を推進するための「組織体制の整備」を重点的に取り組んだが、今後は「具体的な課題解決の仕組みづくり」を重点目標として取り組むこととしている。

そもそも松本市としては、「地域づくり」をどのように定義しているのだろうか。第2次松本市地域づくり実行計画では、「第2編 基本的な考え方」において、地域づくりは「安心して、いきいきと暮らせる住みよい地域社会を構築するため、市民が主体となって地域課題を解決していく活動や取組み」としており、その取組みは、原動力となる「地域力の向上を図る取組み」と、これを基に進める具体的な

「地域課題の解決に向けた取組み」との2種類に分類できると記している。前者における「地域力」とは、地域の自治力、連帯力、教育力、文化力を総合した力で、「ソーシャルキャピタル」とも言われる、いわば地域の基礎体力であるとしている。

「地域力」

地域の4つの力	説明
自治力	住民自らが話し合い、折り合いをつけながら地域を治める力
連帯力	お互い様の精神による地域のつながりの力
教育力	地域の担い手を発掘し、次代の人材を育む力
文化力	地域の文化を住民の共有財産として守り、活用し、地域の誇りを生む力

ところで現在、超少子高齢化型人口減少社会の進展を背景に、要援護者の見守りや災害時の助け合いなど、地域の課題が増大化・複雑化している。社会構造や住民のライフスタイルの変化、人間関係の希薄化や地域活動への無関心などにより、地域コミュニティは厳しい状況にある。このような地域課題は、地域や行政だけでは解決が困難となっており、「互いに助け合いながら、安心して暮らせる持続可能な地域」を創造するために、多様な主体がその特性を十分に発揮し、協働によって地域課題を解決していく必要がある。地域の力はその核となるため、先に挙げた2種類の「地域づくり」を実践していくべきである。その到達点として定められた「松本市が目指す地域の姿」が、以下の5点である。

- ①住民が折り合いをつけて暮らしていける「自治の仕組み」がある地域
- ②住民が集い、生きがいを感じることができる「場」がある地域
- ③お互いを尊重し、学び合い支え合う「人間関係」がある地域
- ④誰かが困ったり、何か行動しようとするときに「支援」がある地域
- ⑤地域の重要課題を解決する「多様な主体による協働の仕組み」がある地域

また、この「目指す姿」を実現するための松本市の地域づくりの基本方針は、以下の3点である。

①基盤づくりの推進

多様な主体がその特性を十分に生かし、協働に

よって地域課題を解決していくため、「5つの協働体制(地域の協働体制、地区支援機関の協働体制、本庁各課等の協働体制、市民活動団体や大学等との協働体制、総合的な協働体制)」の構築を進めるとともに、住民主体の地域づくりを支える職員の人材育成を進め、地域づくりの基盤を固めます

②地域力の向上を図る取組みの推進

地域力を構成する4つの力(自治力、連帯力、教育力、文化力)の強化に向けて、地区の取組みや、地域コミュニティの基礎となる町会の取組みへの支援を進めます

③地域課題の解決に向けた取組みの推進

地域が提起する課題の解決に向け、多様な主体の協働による取組みを進めるとともに、行政が提起する課題の解決に向け、地域と行政とが十分な調整を経た上で課題解決に取り組む体制づくりを進めます

以上により、先に挙げた「安心して、いきいきと暮らせる住みよい地域社会を構築するため、市民が主体となって地域課題を解決していく活動や取組み＝地域づくり」を形にしていけるが、その過程において重要な視点とされるのは、以下の6点である。

- ①お互い様の精神で、住民の主体的な参加により進める。
- ②35地区それぞれの特色を生かしながら進める。
- ③町会と市とが対等な関係を維持し、町会を核としながら進める。
- ④学びを基盤としながら進める。
- ⑤多様な主体の協働により進める。
- ⑥地域のペースに合わせて進める。

なお、「多様な主体による協働」という言葉が幾度と出ているが、主に構成される組織体制は、以下のような「緩やかな協議体」としての「地域づくりセンター」である。

①緩やかな協議体(地域の体制)

住民同士が自由に意見交換し、地区の意思決定を図る場。地区の状況に応じ、町会等を核とする既存の自治の仕組みを最大限に活用して地区独自の組織構成により設置。

②地域づくりセンター(行政の体制)

地域づくりセンターは各地区の地域づくりにおける最前線の拠点であり、支所・出張所(窓口サービス)公民館(学習)、福祉ひろば(地域福祉)の機

能が一体となり、住民主体の地域づくりを支援。

以上のように、地域住民と行政、その他市民活動団体・大学・専門家など様々な主体が連携・協働しながら、松本市ならではの、住民が主体となる地域づくりを推進しているところであり、これにより「健康寿命延伸都市・松本」「人と社会の健康づくり」の実現を目指している。

2 調査フィールドである波田地区に関して

2-1 波田地区の概要

波田地区は松本市の西部に位置し、槍ヶ岳を起点とする梓川流域南岸に広がる平坦地と、飛騨山脈より分かれた山岳地帯、並びにこれに連なる山麓平地より成り立っている。総面積は59.42km²。そのほぼ80%が山間地域であり、太古の昔に自然の力によって、大扇状地と4段の河岸段丘が形成された。西に最高峰標高2,447mの鉢盛山があり、その北東側へ標高900mから600m台にかけて傾斜地が広がり、居住地や耕作地となっている。



波田地区(雪と河岸段丘の地形)

居住地には国道158号線とアルピコ交通上高地線、主要地方道塩尻・鍋割・穂高線(日本アルプスサラダ街道)が通り、近隣市村へのアクセスが良好である。また、松本市役所波田支所、松本市立病院、学校、保育園、体育館、文化センター(図書館、多目的ホールなど)、介護・福祉施設などの各種公共施設を擁しているため、居住者にとって安心・安全で心豊かな暮らしを提供できる地区である。さらに「松本市立地適正化計画」における「都市機能誘導区域」内の「地域拠点」に波田駅周辺が、「居住誘導区域」として波田駅周辺エリアが指定されており、今後の都市計画において松本市西部ブロックの核として重要視されている地区でもある。波田地区の人口等の概要は以下のとおりである。

総人口：15,676人 〔男性：7,547人 女性：8,129人〕

世帯数：6,207世帯 町会数：27町会

(いずれも令和2年1月1日現在)

高齢者人口：4,559人 高齢化率：29.1% (令和元年12月1日現在)

地区の人口・世帯数ともに、ほぼ増加傾向であったが、平成31年1月1日の統計以降は人口が減ってきている。2年分のみの統計結果であるため、断定しかねるところではあるが、高齢化による人口減少傾向が始まりつつあると言える。その反面、世帯数は変わらず増加の一途をたどっており、一部地域で宅地化も進んでいる。詳細は以下の統計資料に示した通りである。

波田地区・住民基本台帳人口の推移

	人口(人)	世帯数(戸)
平成12年	14,432	4,460
平成17年	15,178	4,946
平成21年	15,201	5,221
(波田町合併記念誌「大いなる波田」より)		
平成23年1月1日	15,597	5,497
平成24年1月1日	15,620	5,586
平成25年1月1日	15,614	5,721
平成26年1月1日	15,655	5,801
平成27年1月1日	15,654	5,862
平成28年1月1日	15,656	5,913
平成29年1月1日	15,693	5,999
平成30年1月1日	15,761	6,114
平成31年1月1日	15,732	6,172
令和2年1月1日	15,676	6,207
(松本市統計より)		

かつて波田地区は上波多村、下波多村、三溝村の3村に分かれていたが、明治7年に「波多村」へ合併。その後、村の平和と水田の豊かさを希求して、昭和8年に「波田村」と改名。昭和30年代以降は産業構造の変化を契機に、隣接する松本市のベッドタウンとして人口増加。昭和48年に町制を施行して「波田町」となる。昭和から平成へと元号が変わった後、日本経済の低迷や財政状況の悪化、地方分権の在り方を巡っての様々な議論などを経た結果、平成22年に松本市との合併を決め、現在に至っている。

地区内では様々な団体が精力的に活動が続けている。松本市との合併後に設立された「波田まちづくり協議会」、地域振興のため独自事業を展開する「波

田商工会」、合併前に設立され、地域福祉の向上のため活動する大規模な「波田ボランティア協議会」、地元の男性が主体となるボランティア団体「花咲かじいさんの会」や「山毛櫨の会」、その他に100を超える波田公民館利用団体など、枚挙に暇がないほど多くの組織・団体が地域の中で活躍している。

その中、将来的な少子高齢化社会の到来とそれに伴う地域社会の変化を見据えた上で、波田地区地域づくりセンターを中心とした行政機関や波田まちづくり協議会を中心に、波田地区独自の地域づくりを展開しており、その具体例としては、地区単位での地域づくりに関する学習会やシンポジウム、まちづくりモデル町会推進事業などが挙げられる。目標は『「元気」で活動する高齢者づくりと高齢者に「感謝」する人づくり』であり、「町会」や「隣組」が事業の主体となりながら、「つながり」と「笑顔」をキーワードに、自らの地域について考える機会を創出している。



21区町会から見下ろす松本平

2-2 波田地区の課題

1) 将来的な少子高齢化の進行

波田地区は松本市内35地区の中で3番目に人口が多く、規模の大きな地区であるが、65歳以上の高齢者人口に関しては、市内で最多の地区となっている。高齢化率も松本市平均の27.9%を若干上回っており、町会によっては40.0%を超えるところも見られる。高齢者人口に対する要介護者・要支援者の割合は松本市平均の17.7%に比べ14.6%と少ない数値になっており、健康な高齢者が多いと言えるが、今後2025年にはいわゆる団塊の世代が75歳以上となることから、健康面でのリスクが高まり地域社会に様々な影響を及ぼすことが予測される。前節における記述のように、宅地化が進む一方、人口減少が進行し始め

ている可能性もある。実際に波田地区を担当する松本市の西部地域包括センターでは、認知症対応件数が2年間で2倍以上に増加しており、今後の増加も十分予想される。

高齢者が多い背景としては、前節で記述した通り、高度経済成長期に松本市のベッドタウンとして発展し、人口が急増したことが挙げられる。この時に宅地化が急速に進み、人口が1万人を突破。30代の若い世代が多く転入してきた。それが今から約40年前であり、その方々が一度に高齢化したためである。(数値は、令和元年12月1日現在の松本市統計によるもの)

2) 町会ごとの地域差の大きさ

波田地区の町会数は27であるが、これは松本市の全35地区の中でも2番目に多い数字であり、元々の総面積の大きさ・人口や世帯数の多さも含め、前節・前項の記述の通り、規模の大きな地区である。それに加え、地区内は大扇状地と4つの河岸段丘により構成されており、急傾斜の山岳地帯、山麓平地、平坦地帯が連なっている。地区内では河岸段丘地形の上の地域を「上の段」、下の地域を「下の段」と呼称しているが、地区の中でも地形の違いは如実に表れており、それが気温や気候の違いにもつながっている。例えば山岳地帯・山麓平地は急傾斜も多く、標高も高くなり、平坦地帯よりも気温が低く、雪も降りやすいといった点などである。前節で記述したように、元々波田の地域は上波多村、下波多村、三溝村の3村に分かれていたが、さらに細かく地域の特色が分かれている。その一例として、町会別の人口・高齢化率のデータを表1に示す。

この表から、町会ごとに数値上のギャップが大きいことが指摘できる。地区全体の高齢化率「28.9%」を超えない町会は、全27町会中10町会のみであり、高齢化の進行する町会とそうでない町会が分かれている。その10町会の中には、市役所・学校・保育園・病院・福祉施設などの公共機関、道路や鉄道など交通インフラ、スーパーなど商業施設など周辺的生活環境に恵まれた町会が多い。中でも「27区町会」は宅地化が急速に進む、波田地区の中で最も新しい町会であり、高齢化率は1桁という数値。人口もここ数年で急増している。

一方で、高齢化率が30%を超える町会は前述の「上の段」に属する地域、または高度経済成長の前後で、新興住宅団地として開設された町会が大半である。

表1 町会別調査(2019年2月1日現在)

町会名	1区	2区	3区	4区	5区	6区	7区	8区	9区
人口(人)	1,057	579	800	808	496	664	448	361	848
65以上(%)	33.0	28.2	29.6	24.0	19.8	28.2	29.7	36.6	32.4
75以上(%)	17.0	13.1	14.8	10.5	10.1	11.9	14.5	17.5	16.2
町会名	10区	11区	12区	13区	14区	15区	16区	17区	18区
人口(人)	1,296	295	382	438	139	973	221	159	121
65以上(%)	32.5	32.9	33.2	21.5	40.3	30.3	43.4	40.3	22.3
75以上(%)	17.9	17.6	16.0	10.3	24.5	16.9	21.7	20.1	12.4
町会名	19区	20区	21区	22区	23区	24区	25区	26区	27区
人口(人)	669	973	76	1,717	273	287	373	506	743
65以上(%)	22.4	27.7	32.9	30.5	28.9	33.1	33.2	37.9	4.7
75以上(%)	10.3	18.3	10.5	16.9	16.8	15.7	12.3	14.4	1.6

※この時点での波田地区全体の高齢化率は28.9%

中でも特に高齢化が進み、40%を超える町会は「14区町会」「16区町会」「17区町会」の3町会であり、波田地区の西側に位置している。そのうち「17区町会」は、上高地で有名な安曇地区との境に位置する町会である。また、新興住宅団地として開設された町会というのは「24区町会」「25区町会」「26区町会」の3町会であり、その当時、すなわち昭和40～50年代に転入した若い世代が、そのまま高齢化している現状がある。

以上のように、人口と高齢化率を基準に波田地区を俯瞰しても、町会ごと、小地域ごとに非常に特色があることが分かる。その他、町会の歴史や規模などによっても、特色のあることが住民との対話から窺い知ることができる。古くからある町会は、伝統行事などを通じた住民同士のつながりや隣組単位での活動も盛んであるが、新しくできた町会はその逆である。規模の小さな町会は住民同士の距離感やコミュニケーションが密であるが、大きな町会はその逆である。新しい転入者が多い町会は、昔からの住民とのつながりが希薄である。駅が付近に立地する町会の住民は、電車で外出を楽しむことも可能だが、山麓地帯に居住する住民にとっては、自動車に頼らないと生活できない、高齢化により、病院や買い物に行くのが難しくなるなどの問題がある。

それ故に、波田地区として地域づくりを推進していく際、「町会ごとの地域差が大きい」「地区全体視点での事業は困難」という課題が浮かび上がっていた。前項にて記述した「高齢化の進行」という観点

で地域づくりを考えても、町会や小地域ごとに進行速度に差異がある。「地域のつながりの希薄化」という観点においても同様で、町会によって状況が様々である。27という多くの町会が存在する中、波田地区全体として地域づくりを実践していくのに限界があり、地域住民に広く浸透しなかったという経緯がある。松本市に合併する前は1つの自治体であった波田地区は、松本市を1つに凝縮したような地区であると言える。様々な公共施設や商業施設の集まる中心部、豊かな自然に恵まれた山岳・山麓地帯、周辺地域とのアクセスが良好で、多くの人が転入している平坦地帯、この全てが波田地区であるが、これは松本市における35の地区と同様に、波田地区においても27の地区が存在すると形容しても過言ではない。住民主体の地域づくりを実践していくにあたり、様々な特色ある波田地区を、1つの統一された視点ではなく多様な視点から捉えることが不可欠だ。旧波田町時代は、各町会に2名ずつ「町会担当職員」を配置して町会とのコミュニケーション体制を築いていた事例があるが、そのことから町会単位で地域づくりを考える必要があることが分かる。

3) 地域づくりの体制づくり

旧波田町が松本市に合併して、今年でちょうど10年を迎える。合併後に行財政の仕組みが大きく変わる中、前章で記述した「緩やかな協議体」である「波田まちづくり協議会」が平成26年6月に設立された。当時の波田地区町会連合会が地域課題の解決や今後

の地域づくりを進めるために、その主体となる「住民組織」が必要と考えたのが設立の経過である。この波田まちづくり協議会と、地域づくりセンターや町会連合会など様々な主体が協働で地域づくりを行うこととなっているが、設立後、数年が経過する中で、いくつかの課題が挙げられていた。事業を実施するための人材が不足、町会連合会など地区内の諸団体とのコミュニケーション不足、新規事業を企画立案する人材の不足がその主なものであり、それにより住民のニーズを把握できず、地域課題解決のための具体的な事業や活動に至らなかったという実情があった。

その一方で、地域住民の代表であり意思決定機関である町会連合会の運営においても、見直しが必要となってきていた。町会連合会には、以下の3つの機能がある。

- | |
|----------------------------|
| (1)波田地区の方向性を決める……旧波田町役場の機能 |
| (2)波田地区の意思決定機関……旧波田町議会の機能 |
| (3)地区内要望の取りまとめと行政への要望 |

しかし現状において、行政からの依頼事項など町会長の業務は多岐にわたっており、それに加えて波田まちづくり協議会の一員として事業への参加も求められていたため、業務量が多いという課題があった。そのため、毎月の定例会議の中でも、行政からの連絡事項で大半の時間を消費してしまい、波田地区に関する議論をする機会が少なく、上記(1)の機能を果たすことが困難なところがあった。

以上の両者は、協働の精神をもって事業を推し進める推進協力団体であり、本来であれば、町会連合会の決定した方向性に沿って、波田まちづくり協議会が事業を企画・立案していくべきであった。しかし、両者の意思疎通が図れておらず、波田まちづくり協議会実施の各事業に町会連合会が、実践部隊として参加するという実態があったため、協働による地域づくり事業が円滑に行えていなかった。前項で記述したように、波田地区は規模が大きい1つの視点での地域づくりは難しい部分があるのだが、この両者の協働体制も整わない状況であったため、波田地区としての一体的な地域づくりが、さらに難しくなっていた。

この大きな課題を解消するために、「波田まちづくり協議会あり方検討委員会」を波田まちづくり協

議会、町会連合会、町内公民館長会、地域づくりセンターの代表者により開催し、波田まちづくり協議会の組織再編を検討した。事業内容を整理・統合し、町会連合会をはじめとした地区内の諸団体との情報交換会の開催などを決定し、令和2年度より新体制で事業を進める予定である。また、町会連合会に関しても、令和2年度以降に会議運営の見直しを行う予定であり、事務連絡等を極力簡略化し、波田地区に関して議論しあう時間を保障できるようにしていく。波田町から松本市になって10年が経過したことで、まさにこれから、地域住民が主役となり、様々な主体が協働しながら地域づくりを行うための体制づくりが成されたと言える。

以上の1)2)3)を総合すると、波田地区全体の課題は「将来的な超少子高齢化を見据えながら、町会という小さな地域の単位で、住民が主体の地域づくりを実践する。また、その事例を積み上げていくことで、地区全体の地域づくりへと時間をかけて波及させていく。」ことではないかと考える。

3 本研究の目的設定

3-1 本研究におけるキーワードの設定—1章と2章からの考察を踏まえて—

超少子高齢化や人口減少を根本から修正するのは不可能と言っても過言ではない。しかし、社会の変化を見据えての対策は可能である。松本市としては前述の通り、「健康寿命延伸都市・松本の創造」「人と社会の健康づくり」を最大の目標としており、そのために「松本らしい地域づくり」を実践することとしている。

松本市としての地域づくりの定義は「安心して、いきいきと暮らせる住みよい地域社会を構築するため、市民が主体となって地域課題を解決していく活動や取り組み」とされているが、これを進めていく上で重要な視点として、6つの視点を紹介した。このうち「①お互い様の精神で、住民の主体的な参加により進める」「③町会と市とが対等な関係を維持し、町会を核としながら進める」「④学びを基盤としながら進める」「⑥地域のペースに合わせて進める」の4点に着目したい。

まず①においては、地域の困りごとを「他人ごと」ではなく「自分ごと」と捉え、「自分たちの地域は自分たちで創る」といった住民の主体性を重視している。次に③では、町会は地域を代表する貴重な存在であり、市政運営の重要なパートナーである。

それと同時に、地域づくりを進める核と位置付け、対等な関係から協働を行い、地域づくりを実践することとしている。④では、住民各個人が集まる中で、地域の困りごとを「聞く」、「調べる」、課題について「考える」、「話し合う」、解決に向け「合意する」、「実践する」といった取組みを通じて学び合うことを重視するとしている。公民館はその学習機会を保障する役割を求められているが、この営みを通して地域の自治力向上と、より地域に密着した社会教育を実現するものとしている。最後に⑥では、住民主体の地域づくりのために、住民自身が学習等を通じて地域の課題を理解し、納得した上で、解決に向け取り組んでいくことが必要であるため、住民と足並みを揃えながら、地域のペースに合わせて進めることとしている。これらを総合すると、「松本らしい地域づくり」を実現するためには「町会を核としながら、地域に関する学習の機会を創出すること。それにより地域住民の自治力を高め、住民主体による地域づくりにつなげること。それらを住民の理解と納得に基づき、地域の状況に合わせて進めること」が重要である。

以上の考察と、2章において記述した波田地区の課題とは、合致する点が多い。超少子高齢化の進行という課題は、波田地区だけでなくこの地域においても危惧されていることであるが、その他の課題に関しては波田地区独自のものである。住民にとってより身近である町会を基礎にして、自治力の向上と課題解決への仕組みづくりに取り組むため、本研究では「町会単位における地域住民の自治」をキーワードとして設定する。

3-2 「町会単位における地域住民の自治」に関する諸研究

そもそも町会とはどのようなものなのだろうか。いくつかの文献からその答えを探った。東海自治体問題研究所の編集した「これからの町内会・自治会 いかしあいのまちづくり」では、以下のように定義している。

「したがって、町内会・自治会というときには、つぎのような特徴をもつ地域住民組織を指すことにしたい。すなわち、その組織の名称が何であれ、原則として一定の地域的区画において、そこで居住ないし営業するすべての世帯と事業所を組織することをめざし、その地域的区画内に生ずるさまざまな(共同の)問題に対処することをおして地域の(共同)

管理に当たる住民自治組織である」¹⁾

また同じく、東海自治体問題研究所の「町内会・自治会の新展開」では、町内会を以下のように解説している。

「地域の生活環境を保全し、住みよい地域社会をつくるために日常的に役割を果たすことが期待された組織である。具体的にはさまざまな課題があるが、総括的に表現すれば「まちづくり(あるいはコミュニティづくり)」のための組織ということができるとし、その機能に注目して、住民による「地域共同管理」のための組織ということもできよう。この意味では、全住民に関わる問題を扱う組織として地域になくてはならないものであり、共に生活する住民にはすべてそこに参加する権利が保障されなければならない組織といえる」²⁾

「地域の(共同)管理」「地域共同管理」は同じ意味を持つと考えられるが、「地域共同管理」に関して、山崎丈夫は著書「地域自治の住民組織論」の中で『住民の多様な地域生活諸関係の共同管理機能(自治機能)』³⁾と表現している。これが町会の持つ機能の本質であると考ええる。この機能について端的に説明したのが前掲の「町内会・自治会の新展開」であり、そこでは『住民が共同に利用している地域を共同して管理すること』⁴⁾と説明されている。まさにこれこそが住民自治そのものであり、まちづくりの基礎と言える。また、この「地域共同管理」に関して、同書より以下のように言及されている。

「地方分権化が叫ばれているなかで、住民自治や住民参加のいっそうの強化は不可欠である。住民が組織としてこれを担える主体に成長していく方途を考えると、住民どうしだけでなく、住民と行政とのパートナーシップの強化も含めて地域共同管理の力量を高めていくことが必要である。その意味では、町内会だけでなく、町内会とコミュニティ、さらには地域内の各種住民団体とも手をつないで、まちづくりをすすめていくことが求められている」⁵⁾

すなわち、住民による地域共同管理の力量を高め、様々な主体と連携しながらまちづくりを推進することが重要であると考えられる。

しかし、ここに至るためには課題もある。前掲の「地域自治の住民組織論」「町内会・自治会の新展開」では、実際には行政から依頼される業務が多く、それが町会長の負担増に結び付いている。

すなわち「地域住民組織は(中略)歴史的に、行政としての性格と行政下請け機関としての側面を保つ

てきた。したがって、現在も自治体との間に行政事務処理上の下請関係が強く維持されており、その同じ関係を住民との間で持続しているのである」⁶⁾「この町内会長などの多忙さの一方の原因は、タテ割り行政の多くの窓口と、住民の苦情や注文が町内会の一点で焦点を結んでいることに起因していることにある」⁷⁾、「行政からの広報配布の委託事務はたいへん多いので、会長は会務のほとんどの時間をこれに割く結果になっている状況も見られる。それによって町内会・自治会が地域住民のために本来行うべき活動ができずに、委託事務を果たすだけの自治活動となっているとすれば、町内会・自治会は、ますます行政の下請機関としての性格を強め、住民からもそのようなものとしてしか評価されない組織になるであろう」⁸⁾と記述されている。これは波田地区内外でも顕在化しており、そのため近年の少子高齢化の進行もあり、次の町会役員の担い手がないという新しい課題が浮上している。それに関しては、同書で『行政との安易なもたれあいを排し、旧体質的地域管理から脱却して、住民の要求やエネルギーを結集しうる真の地域住民自治組織への転換が必要である』⁹⁾と記している。

また一方で、地域住民の共同性(つながり)をどのように担保するのかという点も重要な課題となっている。前掲の「これからの町内会・自治会 いかしあいのまちづくり」「町内会・自治会の新展開」「地域自治の住民組織論」に加え、山崎丈夫の「地縁組織論—地域の時代の町内会・自治会、コミュニティ」の記述をまとめると以下ようになる。

「現代の地域社会は、住民構成の多岐性と価値観の多様性がすすむにつれて、地域社会の凝縮性が薄れ、地域的には一種の空洞化状況を見せている。(中略)地域社会からの離脱ではなく、そこにおいて他者との関係をいかにつくっていくのかということが、現代社会の大きな課題である」¹⁰⁾

『地域社会がより静止的であった時代には、地域住民は相互に顔見知りの関係にあり、地域や住民におこった出来事は、一度に広がって地域に共通の知識となった。また、これらが歴史的に積み重ねられ、教訓が引き出されて「生活の知恵」となっていったのである。(中略)今日、定住化がいられているとはいえ、なお高い流動性をもつ地域社会で、しかも人びとの関心は地域外にも大きく広がっているとき、地域についての共通の認識や地域での「生活の知恵」は断片化し、しぼんでしまっているかのようで

ある』¹¹⁾

「経済の高度成長過程は、大量消費型・都市的生活様式を形成させた。この過程は、一定の生活水準の向上を背景として、マイホーム主義志向による親しいものだけで住む核家族化、世帯人員の縮小という現象を生み出した。このような過程は、それまで築いてきた近隣諸関係、地域への依存関係を弱めさせることになり、各世帯の「自立化」が世帯の地域離れを進めることになった」¹²⁾

「お互いに迷惑をかけないように努めながら、しかし、土地空間の共同利用者として必要な交流を持ち、お互いに住みやすい生活環境を創っていく仲間として協力しあうことは、町内会・自治会の出発点である」¹³⁾

「生活の個別化が進み、一方で生活の社会化が進行していく間を埋めて、人間関係の省略ではなく、地域住民の共同性(つながり)をどのように強化し、住民同士が真に相手のことを考えていける文化的力量を高め、地域全体に力をつけていくのかということが地域の大きな課題として問われてきた」¹⁴⁾

「時代の変遷とともに人々の生活様式や価値観が多様化する中、「地域」や「町会」から離れている世帯も増えている。その中、いかに同じ地域に住む者としての関係性を構築するかが課題となっている。「地域の中のつながりが希薄となり、同じ地域に住んでいるのに顔も名前も知らない人がいる」という意見が波田地区内外で多く見られる。これに対し「地域自治の住民組織論」では、『日常的に地域のつながりの中で相互の条件を知り、援助しあっていく関係を明確にしていくことが必要なのである。まちづくりの在り方は、まず、集まって生きることが最も保障されないといけない』と記している。

以上のように、様々な研究者や文献により今後の「町会単位における地域住民の自治」の在り方が議論・提唱されてきたが、以下のように要約することができる。

今後、住民が主体となつてのまちづくりを推進していくために、地域共同管理(住民自治)の力量を高めることが必要。そのために「自治体から依頼される業務負担の軽減」「地域住民同士の共同性(つながり)の保障」に取り組む。以上により、地域の状況・課題を住民同士が把握しあい、その解決に向けて主体的に動き出す町会を目指すべきである。

3-3 本研究の最終目的—これまでの論述を踏まえて—

前述したように、「松本らしい地域づくり」の実現のためには「町会を核としながら、地域に関する学習の機会を創出すること。それにより地域住民の自治力を高め、住民主体による地域づくりにつなげる。それらを住民の理解と納得に基づき、地域の状況に合わせて進めること」が重要である。これについては、前節の最後にまとめた内容と重なる部分がある。松本市の定義する地域力(自治力)は、「地域共同管理の力量」にそのまま置き換えることが可能だ。「自治体から依頼される業務負担の軽減」「地域住民同士の共同性(つながり)の保障」に関しては、既に波田地区として独自に取り組み始めているところであり、それは前章2節3)で記述した通りである。ただしこちらに関しては、令和2年度から動き出すものであり、地域づくりインターンの定められた期間内でより実践的な地域づくりを行うためには、町会単位での地域づくりに取り組む必要がある。地区全体として動き始めてはいるが、「町会が地域づくりの核」であるからには、町会単位での実践を同時進行すべきである。しかし、具体的にはどのような実践が必要なのであろうか。

以上から、本研究のテーマをこのように設定し、この研究活動から得られたものを、松本市及び波田地区の地域づくりの一助とすることを目的としたい。

- ・地域力(自治力)の向上と地域課題の解決へ向けた取り組みを、町会単位で推進するために、どのような具体的実践が求められるのか
- ・「松本らしい地域づくり」を実現するために、必要とされる要素は何か

4 主な実践内容

平成30年度に関しては波田地区全体の状況を把握するために地区全体の事業へ積極的に参加していたが、前節で提示したテーマに取り組むため、本年度は町会単位で実施されている活動・事業へ重点的に参加した。そこから明らかになった事項は以下のとおりである。

4-1 波田地区まちづくりモデル町会推進事業への参加

2章において触れたが、波田地区独自の地域づくり事業として平成30年度から「まちづくりモデル町会推進事業」を展開している。この事業は、絆づく

り推進会議(地域づくりセンターなど波田地区担当職員)と波田まちづくり協議会が主催するもので、波田地区内の町会へ参加を依頼し、以下の事業を実施した。

- 夏季：地域づくり講演会(全体研修会)への参加
- 秋季：松本市立病院とスポーツジムインストラクターと連携した「健康・介護予防講座」
地域のつながりをテーマにした、住民参加による「町会ワークショップ」
- 冬季：地域づくりシンポジウムにおける活動事例報告

上記の事業は、地区全体ではなく、町会単位での地域活動への取り組みを推進するものであり、年度をまたぎながら数年をかけて地区全体へ広げていくという戦略に沿って実施されている。事業の企画と費用負担は「絆づくり推進会議」や「波田まちづくり協議会」が担当し、参加する町会は町内住民へ事業の周知と募集を行った。初年度である平成30年度には3つの町会、2年目に当たる本年度は10区町会と11区町会の2つの町会が参加した。10区町会と11区町会の概要は以下のとおりである。

- [10区町会]人口：1,296人 高齢化率：32.5%
 - [11区町会]人口：295人 高齢化率：32.9%
- (2019年2月1日現在)

2町会は、いずれも「中波田」と呼ばれる地域に属する昔ながらの町会であるが、人口規模に大きな差異がある。この2つの町会において、それぞれの住民が公民館に集まり「地域のつながり・集まりの今と昔」「現在の困りごと、今後の心配ごと」の2点をテーマにワークショップを開催した。松本大学の中澤准教授に全体のファシリテーターを依頼し、波田地区担当職員や波田まちづくり協議会の役員・総務部会員が、参加者を約5人ずつに分けた、小グループ内のまとめ役を務めた。本番では2時間弱の時間を使い、それぞれ町会に関して闊達な意見交換を行った。その結果には、両町会でそれぞれ違いはあるものの、以下のような意見が共通して出された。

- [地域のつながり・集まり]
- ・現在も続いている行事などはあるが、無くなってしまったものが一定数ある

[現在と今後の困りごと]

- ・高齢化の進行に伴う生活上、防災上の不安
- ・近所のつながりが少ない。交流がない
- ・役員の担い手不足
- ・空き家対策

[これから必要なつながり]

- ・世代を超えて交流ができる機会
- ・ボランティアによる支えあい

「ワークショップ」という言葉は、地域の住民にとって聞きなれないものであったようだが、実際の場面では様々な世代が自由に活発な話し合いを行うことができた。この結果をもとに、11区町会では令和2年度の新しい町会行事として納涼祭を企画した。10区町会の今後の方向性に関しては、現時点では不明であるが、このモデル町会推進事業とは別に、独自の事業として認知症に関する学習会の開催や、要援護者を想定した防災訓練を計画していたため、これらの事業が次年度へつながっていく可能性はある。

以上のことをまとめると、この町会ワークショップを開催したことで、住民同士が直接顔を合わせながら自らが住む町会に関して、意見交換が行える貴重な機会になったものと考ええる。また、その成果をもとに新たな事業を計画した町会もあるため、意見交換を行う中で今後の地域づくりの方向性を考えるきっかけになったと言える。

4-2 町会単位での地域づくり活動への参加および調査

本年度、今後の地域づくりの在り方を検討することを目的として、波田地区内外における、町会単位での地域づくりの実践に参加した。

1)花咲か爺さんの会

波田地区の26区町会において組織された、住民有志の団体である。平成26年に高齢男性の集まる場を創出することを目的に立ち上げ、定期的な親睦会・交流会の他、町会内の公共施設(公園、公民館など)の環境整備、夏休み期間中の小学生の学習支援、町会内サロン事業の支援など、多岐にわたる活動を実施している。公園の管理に関しては松本市から26区町会に委嘱されており、ある程度までは行政ではなく町会で管理することとなっている。花咲か爺さんの会は、町会から依頼されてこのような管理作業を行っているのである。現在の会員は13名で、その多

くは70代である。活動への参加を強要することはないが、親睦会には積極的に参加するよう声をかけている。地域のために活動することは大切なことであるが、当然それぞれが仕事や家庭の事情があるため、無理強いはいしない。ただ、それでも定期的に集まって、楽しく会話をするに最大の意義を見出しているため、親睦会には無理のない範囲で参加してもらうことにしている。参加者が互いに話をしていく中で、地元である26区町会のことや波田地区のことも話題になり、今後の活動をどうしていくかという打ち合わせも可能となっている。この活動は、今後超少子高齢化社会を迎えるにあたって、日本政府の目指している「高齢者の社会貢献」「生涯現役社会」の実践事例であると言える。地域に貢献できること、他者と交流できることが楽しいし、やりがいであると会員は語っている。

2)山毛櫨の会

波田地区の11区町会を中心に活動する団体であり、平成7年に立ち上げた後、現在まで活動を継続している。11区町会には「夫婦堤」と呼ばれる桜の名所があるが、この周辺の環境整備、小中高の生徒を集めたイベント「夫婦堤海音楽祭」の企画・実施、その他不定期での交流会などを行っている。「夫婦堤音楽祭」は「子供たちと地域との触れ合いの機会をつくる」ことを目的に平成14年に立ち上げ、現在まで17回開催している。会員の多くは11区町会の住民であり、年齢層は20代の若年層から年配の方までと幅広い。現在の会員数は約20名で、殆どが男性だが、一部夫婦で参加する住民もいる。この会を立ち上げた現会長によると、昔はどの町会でも「親交会」と呼ばれる団体があり、そこで地域の住民が世代を問わず交流しながら、様々な共同作業を実施していたということである。この山毛櫨の会もまた、様々な活動を通じて会員同士の交流を図ることを目的としており、花咲か爺さんの会と同様に無理のない範囲で会員に参加してもらっている。若い世代も少しずつ新規会員として参加し始めており、住民有志の団体として精力的に活動している。

3)赤松の郷づくり協議会

波田地区の17区町会で組織された団体であり、現在の会員は25名で令和元年に女性が1名加入した。主に梓川の河川敷や町会内の公園、空き家の庭木の剪定、昭和電工(株)赤松発電所の駐車場の環境整備、

神社の鳥居の修繕、伝統行事である「三九郎」の準備、その他公民館の玄関タイルの修繕の検討など行っている。最初は、現在の会員の1人が個人的に河川敷の草刈りをしていたが、そこに少しずつ地元住民が集まり、平成20年から団体として活動を行うようになった。会員からは一定額の会費を徴収しているとともに、17区の町会から仕事を依頼されることもあるため、町会からも資金援助を受けている。また、河川敷の管理を行っていることから土地改良区からも管理費を受け取り、それら全てを運営資金にあてている。地域の課題は地域で解決するための活動であるが、その前提として「やりたい」「楽しい」という住民の思い・主体性が大切である、また他者のためでなく、自分自身のためにボランティアを行うものであり、他者からの「やらされて」ではいけないと会員として参加している町会長が述べていた。上記の2つの団体と同様に、赤松の郷づくり協議会も活動を終えた後の慰労会を大切にしており、それが会員の皆さんの「楽しみ」にもなっている。

4) 居酒屋公民館(寿地区)

波田地区外の事業ではあるが、寿地区における町会単位の取り組みの調査を行った。寿田長町会では、独自に「居酒屋公民館」を立ち上げ、5年間継続。毎月第3土曜日の夜に公民館を開放し、参加者に1,000円の会費と料理などを持参してもらい、住民同士の交流と語り合いを実施している。毎回平均して8名ほどが参加し、時々女性が参加することもある。この取り組みの目的は、住民の集まる場をつくり、住民同士の情報交換を行うことにある。その中で様々な話題が持ち上がり、市営団地の塗装の修繕や交通事故の起きた交差点に注意看板を設置するなど、実際に身近な地域課題の解決につなげたケースもある。この取り組みのきっかけになったのは、地区で開催された「地域包括ケアシステム」の学習会で、住民の集まる「場づくり」の必要性を知ったことである。「地域包括ケアシステム」は今後の超少子高齢化社会に対応するために、日本政府が定めた住み慣れた地域で豊かな暮らしを続けられるための仕組みであり、行政・地域住民など多様な主体の協働により地域福祉の推進を図るものである。「場づくり」により様々な住民から情報を収集し、それを身近な地域づくりに活用するという点で、この取り組みも町会単位の地域づくりの先進的な事例である。

4-3 町会単位での地域づくりの実践

これまで記述したのは、波田地区内外での事例調査が主であるが、ここでは「町会単位での地域づくり」に関する具体的実践について記述する。波田地区に27ある町会のうち、1つの町会に協力してもらい、そこを拠点としながら任期終了までの研究活動を行う予定である。

今回協力を依頼したのは、花咲か爺さんの会の項で記した26区町会の隣に位置する、25区町会である。25区と26区は、2章で記述したように波田地区のベッドタウンとして大きく発展した時代に、新しく開設された町会である。昭和52年に当時の長野県企業局により北原団地が造成され、それが25区・26区となった。これをきっかけに人口はさらに増加しているが、この時に増えた住民の年齢層は30代と9歳未満の方々という統計があり、働き盛りの子育て世代が増加したと分析されている（「波田町誌 歴史現代編」より）。以上の経緯から、この25区と26区町会は、波田地区の中でも比較的新しい町会であるが、新興住宅地であるが故に、高齢化が進んでいる。25区と26区のみに言えることではないが、2章で記述したように、現在より40年ほど前に多くの人が波田地区内に転入したために、高齢者人口が多くなっているのが現在の波田地区の状況である。新興住宅地である25区と26区はその典型的事例であると分析する。前掲の町会別調査の表をご覧くださいと分かるように、ともに高齢化率は波田地区の中でも高くなっており、伝統行事の三九郎は共同で企画・準備している。

しかし、26区ではなく25区のみに依頼をしたのは、25区町会でサロン事業を運営しているボランティアより、個人的に「25区町会の活性化のために協力して欲しい」と声をかけられたためである。そこで、25区の歴史についての調査、町会長からのヒアリングなどを通じて、25区町会の状況を分析した。両町会の人口と高齢化率は以下のとおりである。

[25区町会] 人口：373人 高齢化率：33.2%

[26区町会] 人口：506人 高齢化率：37.9%

(2019年2月1日現在)

町会の歴史的経緯は前述の通りであるが、26区町会と比較すると人口が少なく、高齢化率も低い。高齢化率が比較的低くなっている理由は、近年25区において若い転入者が増えてきていることである。また、その居住地には偏りがあり、町会の中心部には

長年居住している人が多く、それを囲むように新しい転入世帯が居住している。その一方で、26区に関しては新しい転入者はそれほど多くない。以上のことから考えると25区町会は今も昔も新興住宅地で、高齢化が進みつつ新しい住民も増えているが、居住地には偏りがあるということで、その点からすれば波田地区全体を凝縮したような町会であり、波田地区の中でも特徴的であると言える。また、26区においては前節で記述した「花咲か爺さんの会」の存在や、前々節で述べた「まちづくりモデル町会推進事業」に平成30年に実施していることから、地域づくりにおいて先進的な町会であると言える。対して25区は「花咲か爺さんの会」のような住民主体のボランティア団体もなく、「まちづくりモデル町会推進事業」は未実施である。このため、25区町会は波田地区の中でも特徴的な町会であり、これから地域づくりを推進していく必要があるとして研究活動の協力依頼を行い、町会長をはじめとした町会役員の配慮によって、町会運営に携わることができた。25区町会でこれまで実践してきたことは、主にこの3点である。

- ・町会事業への参加(清掃など)
- ・役員会への参加
- ・町会の全世帯アンケートの実施

25区町会について、住民や役員との関係づくりを行うとともに、ヒアリング及びアンケート調査を通じて明らかになった、具体的な町会の状況やニーズは以下のとおりである。

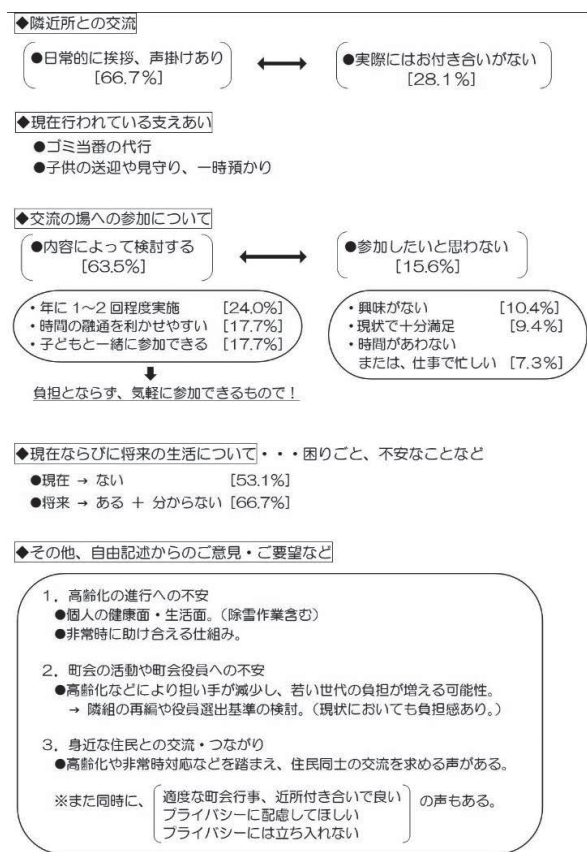
ヒアリング内容

- ・高齢化が進行しているが、若い世代も転入している。町会内の清掃や納涼祭などで年代や居住年数を問わない交流はできているが、日常的な関わりは薄い。
- ・隣組によって世帯数や年齢構成も異なるため、それぞれ特色がある。組同士の合併の話もあることがある。
- ・夏の納涼祭では100人前後が集まり、盛況のうちに終わった。子供も大勢参加し、とても喜んでた。
- ・敬老会は実施しない。招待する人が多すぎるため、記念品の配布のみ行う。10年ほど前に実施した前例はあるが、参加者は少なかった。
- ・5年ほど前に、恒例行事として開催していたお花見会を廃止してしまった。本年度になり、新しく

企画しようという議論もあったが、予算と役員の労力の問題から先送りとなった。

- ・町会内で交流会を開いても、若い世代の方々が参加するかどうか分からない。役員の負担に関する意見もあったが、実際に参加する前と後では感じ方が変わる場合もある。
- ・町会の中には1人暮らしの高齢者はあまり多くないが、高齢の夫婦のみの世帯が多い。高齢者の居場所づくりが必要だと思う。気軽に、子供も参加しやすいようなものを。
- ・交流会を開いたとしても、その場に女性がいれば女性に片付けなどの負担が集中しがちである。個人的には、アルコールも控えた方が良いと思う。
- ・地域の支えあいの重要性は理解しているが、実際にどこにどのような方がお住まいなのか分からない。
- ・他地区のことを聞くと「楽しい」「面白い」のが公民館活動という印象を受けるが、波田に戻ってくると逆に「負担」という印象が変わってしまう。
- ・町会長が個人的に男性のみの集まりをつくり、居酒屋公民館のような親睦会を定期的で開催している。メンバーは現在のところ6名だが、あまり人数を増やす予定はない。

【アンケート調査 集計結果(概要)】	
配布部数：128部	回収部数：96部 (回収率：75%)
＊特に多い回答のみを掲載しております。 ＊アンケートの内容は一部、松本市社会福祉協議会のものを参考にさせて頂きました。 直接の関係性は、ございません。ご了承ください。	
◆年齢層	
●60代と70代の方が半数を占める [49.0%] ※世帯ごとの調査→誤差あり	
◆家族構成	
●核家族(夫婦のみ、親子のみ)が大半 [82.3%]	
◆居住年数	
●5年以内 [25.0%]	} 二極化傾向
●30年以上 [42.7%]	
◆25区を居住地として選んだ理由	
●周辺施設も含めた住環境の良さ [56.2%]	
◆住み心地について	
●満足感がある [54.2%]	●満足 [17.7%] + やや満足 [36.5%]
●どちらとも言えない [34.4%]	
◆25区で取り組んでほしいこと	
●高齢者が安心して暮らせる環境づくり [42.7%] ●災害時の助け合いの仕組みづくり [37.5%] ●住民同士の交流の機会の充実 [20.8%] ●隣近所の住民間での助け合いの促進 [20.8%]	



以上から、25区町会は、核家族が多く、長年居住している年配の人々と、近年転入してきた若い人々とで二極化している。また、高齢化などに対する不安やニーズはありつつも、既存の町会活動や役員の在り方、隣組の在り方などにも不安要素がある。隣近所の住民とコミュニケーションが取れている住民が多い一方で、付き合いのない住民も一定数存在している。現在の生活に関しては比較的安定していると言えるが、将来の生活に関しては不安を感じる住民も多い。

これを踏まえ、今後どのような地域づくりが求められるのか、次章にて具体的に考察していく。なお、アンケート調査結果の詳細は、巻末に掲載する。

5 令和元年度の実践の総括と次年度以降の展望

本年度の活動は、前年度の方向性を大きく転換したということもあり、具体的に地域課題を解消する実践にまで至らなかった。しかしその反面、波田地区の地域づくりに関しての見識を深めることができた。これまでの総括と今後の展望は以下のとおりである。

5-1 波田地区まちづくりモデル町会推進事業および町会単位での地域づくり活動に関する考察

「波田地区まちづくりモデル町会推進事業への参加」では「まちづくりモデル町会推進事業」および「町会単位での地域づくり活動への参加および調査」では、様々な「町会単位での地域づくり活動」に関して整理した。これらはそれぞれ別種類の取り組みであり、その取り組み内容も異なるものであるが、共通しているのが「住民同士で集まって話をする事」である。3章で指摘したが、戦後からの復興や高度経済成長、平成の時代へと日本社会が大きく変化していく中で、地域社会の凝集性が薄れたという課題があり、それ故、住民主体での地域づくりを实践する上で「地域住民同士の共同性(つながり)の保障」が求められるようになった。「波田地区まちづくりモデル町会推進事業への参加」で指摘したように、実際に「近所のつながりが少ない。交流がない」という意見が町会ワークショップで挙げられたが、地域住民同士の共同性(つながり)が保障されていないと考えられる。現代の地域社会において地域住民同士の共同性を保障することが、「住民が共同に利用している地域を共同して管理する」という「地域共同管理」の機能を回復することにつながると考える。そのための具体的実践が「住民同士で集まって話をする事」であり、これをきっかけにして、普段住む地域に対する意見交換を行い、それが今後の地域づくりに活かすことが可能となる。

また、もう1つの視点として「町会単位での地域づくり活動への参加および調査」より、「楽しんで参加すること」が重要であることが挙げられる。いずれの取り組みも、参加を強要しておらず、各々の参加者が取り組みそのものを楽しみながら、主体的な関わりを続けている。地域に関わる活動は、任意の参加であり無理強いするものではない。他者に言われて受動的に参加したとすれば、住民による主体的な地域活動、地域づくりにはなり得ない。職場でも家庭でもない第3の居場所として機能するためには、「楽しさ」を感じることが前提であり、この要素が保障されなければ参加者の主体性を損なう危険性がある。

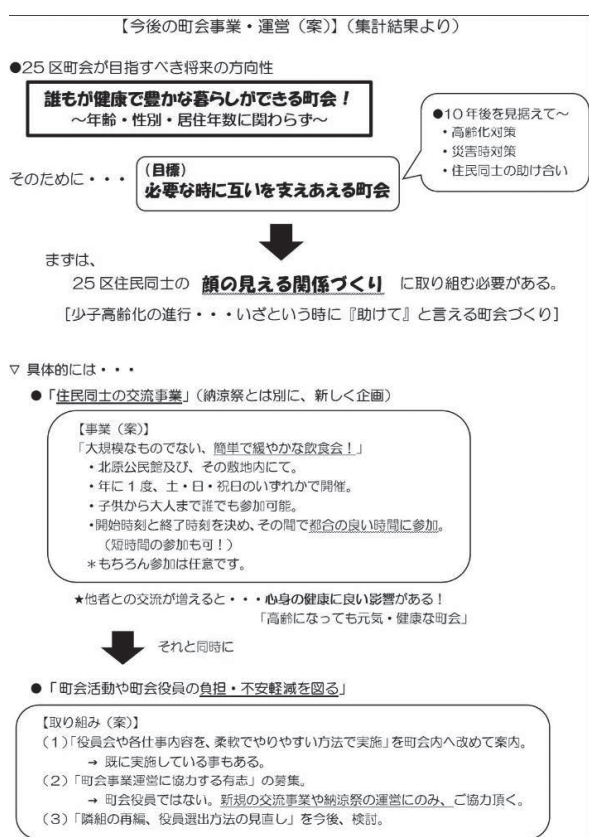
以上から、住民主体による地域づくりのためには、住民同士で集まって話をする事と、無理なく楽しんで参加できることの2つの要素が不可欠である。

特に波田地区においては、地区全体としての地域

づくり体制を一新する状況にある。この2つの要素は地域づくりの原点とも言えるべきものでもあり、重要点として捉えながら今後の活動へ活かしていくことが重要である。

5-2 「町会単位での地域づくりの実践」に関する考察

「町会単位での地域づくりの実践」においては、ヒアリング調査やアンケート調査の結果から、25区町会の現状やニーズなどを広く分析することができた。それをもとに、町会長と相談しながら作成した今後の方向性は、以下の通りである。



「誰もが健康で豊かな暮らしができる町会」を将来的に目指すため、「必要な時に互いを支えあえる町会」を目標に「住民同士の顔の見える関係づくり」に取り組んでいく必要がある。前節で得られた考察も踏まえれば、「簡単に緩やかな交流会」を企画し、同時に「町会活動や役員に関する負担感・不安感の軽減」を図ることが重要である。上記の案は、アンケート調査のまとめとともに、25区住民総会の資料に添付して全戸配布を行った。新型コロナウイルス感染拡大の影響により住民総会は中止となってしまったため、25区住民に直接説明する機会を失ってしまったが、意見は随時受け付け、令和2年度の役員会で

具体的に協議することとしている。

前節で記述したように、住民の主体性を損なっては、本来の地域づくりとはなり得ず、ただ新しく事業を増やして町会役員をはじめとした住民の負担を増やすだけとなってしまふ。したがって、役員会をはじめ、住民主体で検討を行う必要がある。地域づくりインターンの残り1年の任期を考えると、「住民に丸投げするような事態」にならないようにするため、次年度の活動として、これまでの調査結果を25区町会の住民に丁寧に説明を行い、地域づくりに関する議論を行っていく予定である。

5-3 おわりに

これまでの2年間の活動を通じて、地域づくりの本質を学ぶことができた。地域住民の自治力の向上を実現するためには、当然多くの時間が必要となる。綿密なコミュニケーションにより住民の皆さんと歩調を合わせつつ、1つ1つの実践を丁寧に積み上げていき、町会という小さな地域を基礎にした地域づくりのモデルを構築する。これを筆者の3年目の目標としたい。

参考文献・巻末資料

- ・江崎禎英「超高齢社会への対応—生涯現役社会の構築を目指して—」2017, 平成29年度九州ヘルスケア産業推進協議会通常総会 講演資料
- ・江崎禎英「超高齢社会への対応～生涯現役社会の構築を目指して～」2018, 松本市第8回世界健康首都会議 講演資料
- ・松本市ホームページ(各種統計資料、第2次松本市地域づくり実行計画、松本市立地適正化計画)
- ・河合雅司「未来の年表2 人口減少日本であなたに起こること」2018, 講談社
- ・波田町役場合併記念誌検討委員会「波田町合併記念誌 大いなる波田 まほろばのまち 136年のあゆみ」2010, 長野県東筑摩郡波田町
- ・波田地区文化財調査委員会「波田地区文化財マップ～波田の歴史を見る～」2017 (作成者と発行者は同じ)
- ・波田公民館地域学習テキスト作成委員会「波田地区地域学習テキスト」2015, 松本市教育委員会
- ・山崎丈夫「地域自治の住民組織論」1998, 自治体研究社
- ・山崎丈夫「地縁組織論—地域の時代の町内会・自治会。コミュニティ」1999, 自治体研究社
- ・中田実監修・東海自治体問題研究所編集「これからの町内会・自治会 いかしあいのまちづくり」1995, 自治体研究社
- ・東海自治体問題研究所編(編集代表・中田実)「町内会・自治会の新展開」1998, 自治体研究社
- ・市民タイムス掲載記事「居酒屋公民館 集い盛況 松本市の寿田町町会」2018年10月3日
- ・波田町誌編纂委員会「波田町誌 歴史現代編」1987, 波田町教育委員会

波田25区町会における全世帯アンケート調査 集計結果(以下に選択質問、自由記述質問に分けて掲載)

選択質問①

令和2年2月

25 区町会に関するアンケート調査 集計結果

松本大学 特別調査研究員
奥原芳紀

実施期間：令和元年 12 月 19 日～25 日
配布枚数：1 2 8 部
回収枚数： 9 6 部 (回収率：7 5 %)

▼各集計表における「割合」は、回収枚数 96 部から計算したものです。(小数点第 2 位を四捨五入)
▼自由記述形式の回答に関しては、別紙を参照。

●25 区町会について、(自由記述以外の)集計結果から分かること。

◆60 代と 70 代が多い。また、核家族が多い。(問 2&問 3)
◆40 年近くお住まいの方と、5 年以内にお住まいになった方の二極化傾向。(問 4)
◆住み心地に関して、満足感を感じておられる方が多い。
一方で「どちらとも言えない」も多い。(問 6)
◆町会として取り組んでほしいこと「高齢化対策」「災害対策」「住民同士の交流」の順に多い。
(問 8 & 9)
◆近いあいさつも含め、日常的に隣近所の方とコミュニケーションを取っている方が多い。
しかし一方で、「実際にはお付き合いがない」方も多い。(問 10 & 11)
◆住民同士の交流の場について、「内容によって検討する」の回答が圧倒的に多い。
年に 1 ～ 2 回程度の、気軽に参加しやすいものが求められているか。
「参加したくない」理由はそれぞれ。(問 13 ～ 15)
◆比較的、現在の生活に関しては安定しているが、将来のことを考えると不安を感じる方が多い。
(問 16 & 18)

問 1. あなたの性別を教えてください。(該当するものに○印を)

選択項目	回答数(個)	割合(%)
男性	46	47.9
女性	49	51.0
無回答	1	1.0

◎考察
なし

選択質問②

問 2. あなたの年齢を教えてください。(該当するものに○印を)

選択項目	回答数(個)	割合(%)
29 歳以下	3	3.1
30～39 歳	14	14.6
40～49 歳	11	11.5
50～59 歳	16	16.7
60～69 歳	19	19.8
70～79 歳	28	29.2
80 歳以上	5	5.2

◎考察
「70～79 歳」の回答が最多。→25 区開設時に居住された方々と考えられる。
次に多いのは「60～69 歳」の回答。世帯ごとの調査であるため、実際の年代構成とずれる可能性はあるが、60 歳以上が多いことがこの質問から分かる。

問 3. あなたの家族構成を教えてください。(該当するものに○印を)

選択項目	回答数(個)	割合(%)
1 人暮らし	10	10.4
夫婦のみ	32	33.3
2 世代世帯(親と子)	47	49.0
3 世代世帯(親と子と孫)	6	6.3
その他	0	0.0
無回答	1	1.0

◎考察
「夫婦のみ」と「2 世代世帯(親と子)」の回答が多い。→核家族が多い。
「夫婦のみ」のうち、高齢夫婦が多かった印象がある。他の質問より「子供が家にいない、戻ってこない」という回答も見られていた。

選択質問③

問 4. あなたのご家族が「25 区町会」に住んでいる年数を教えてください。(該当するものに○印を)
※おおよその数字で大丈夫です。

選択項目	回答数(個)	割合(%)
5 年以内	24	25.0
10 年以内	3	3.1
15 年以内	7	7.3
20 年以内	5	5.2
25 年以内	9	9.4
30 年以内	6	6.3
35 年以内	13	13.5
40 年以内	18	18.8
それ以上	10	10.4
無回答	1	1.0

◎考察
「5 年以内」の回答が最多。しかし、40 年前後(「35 年以内」「40 年以内」「それ以上」)でまとめて見ると、ここが最も多くなる。
→最近居住された方、25 区開設直後に居住された方の二極化傾向にあるのではないかな。

問 5. ⇒別紙

問 6. 「25 区町会」の住み心地について、どのくらい満足していますか。(該当するものに○印を)

選択項目	回答数(個)	割合(%)
満足	17	17.7
やや満足	35	36.5
どちらとも言えない	33	34.4
やや不満	6	6.3
不満	2	2.1
無回答	3	3.1

◎考察
「やや満足」が最多。その次に「どちらとも言えない」が続く。比較的満足されている方が多い印象だが、「満足」の回答者以外は、全体的に不安・不満要素、困りごとなどが見られた。詳細は別紙にて。

問 7. ⇒別紙

選択質問④

問 8. 現在、「25 区町会」の中で「充実している」「整備されている」と思うものはなんですか。
(該当するものに○印を) ※複数回答可

選択項目	回答数(個)	割合(%)
隣近所の住民とのコミュニケーション(あいさつ、声掛け等)	34	35.4
隣近所の住民間での助け合い	13	13.5
住民同士の交流の機会	10	10.4
公園や道路、公民館などの公共設備	35	36.5
→このうち「公園」に○を付けた方が 1 名。		
災害時の助け合い	4	4.2
子供が遊ぶ機会や、居場所等	16	16.7
高齢者の方が安心して暮らせる環境	8	8.3
その他	2	2.1
▼月に 1 度の清掃		
▼春から秋にかけての 25 区住民による経の清掃は、コミュニケーションの大切さを感じる。		
特になし	30	31.3
無回答	7	7.3

問 9. 今後、「25 区町会」の中で「重点的に取り組んでほしい」「期待したい」と思うものはなんですか。
(該当するものに○印を) ※複数回答可

選択項目	回答数(個)	割合(%)
隣近所の住民とのコミュニケーション(あいさつ、声掛け等)の充実	19	19.8
隣近所の住民間での助け合いの促進	20	20.8
住民同士の交流の機会の充実	20	20.8
公園や道路、公民館などの公共設備の整備	19	19.8
→このうち「道路」に○を付けた方が 1 名		
災害時の助け合いの仕組みづくり	36	37.5
→このうち「冬季などに道路などの除雪」という記述が 2 名。		
子供が遊ぶ機会や、居場所等の充実	21	21.9
→このうち「特に公園の子供の自由度が少なくなった。(サッカー・野球の禁止)」という記述が 1 名。		
高齢者の方が安心して暮らせる環境づくり	41	42.7
その他	3	3.1
▼人口が減っていることと合わせ取り組みも減らす。		
▼若い世代、子供に目を向けて欲しい。		
▼隣組の軒数の調整、高齢者世帯と地区役員の関わり方を検討して欲しい。		
特になし	15	15.6
無回答	8	8.3

選択質問⑤

◎考察（問8・問9あわせて）
以上の2つの質問は相互に対応しており、回答数と割合を比較できる（マーケティング箇所は、問9において数値が上昇したもの）。とりわけ「災害時の…」と「高齢者の…」の数値における差が顕著。
「その他」の項目において、一斉清掃に関する好意的な意見（問8）もあるが、一方で取り組みを減らすべきという意見もある（問9）。また、隣組の再編や役員に関するニーズもあり（問9）。

問 10. 隣近所の方とどのくらいの頻度で会話をしていますか。（該当するものに○印を）

選択項目	回答数（個）	割合（％）
ほとんど毎日	5	5. 2
週に5～6回	2	2. 1
週に3～4回	16	16. 7
週に1～2回	26	27. 1
月に1～2回	29	30. 2
ほとんどない	14	14. 6
その他	4	4. 2

▼季節によって違うので、何とも言えない。
▼軽いあいさつ程度。
▼会った時に。
▼夏は毎日外で食うが、冬は雪かきの時くらいに減る。

無回答	2	2. 1
-----	---	------

※（1）（3）同時回答×1 （5）（6）同時回答×1

◎考察
「月に1～2回」→「週に1～2回」の順に回答が多くなっている。一方で、「ほとんどない」の回答も一定数見られている。「その他」における回答からすると、季節による変化も考えられる。

問 11. 隣近所の方と、どの程度の付き合いがありますか。（該当するものに○印を）
※複数回答可

選択項目	回答数（個）	割合（％）
日常的にあいさつ、声掛けをする人がいる	64	66. 7
一緒にお茶のみや食事ができる人がいる	16	16. 7
町会（地区）の行事等へ一緒に参加する人がいる	26	27. 1
困りごとを相談する相手がいる	6	6. 3
日常生活の支援（ゴミ出し、掃除、車での送迎、子供の見守り等）をしてくれる人がいる	6	6. 3

選択質問⑥

災害時や緊急時（体調が悪い時など）に助けてくれる人がいる	7	7. 3
顔を知っている程度で、ほとんど付き合いのある人はいない	23	24. 0
ご近所付き合いをしたいと思いますと思うが、実際は全く付き合いがない	4	4. 2
ご近所付き合いの必要性を感じていない	5	5. 2
その他	3	3. 1

▼顔が合えばあいさつ程度。
▼軽いあいさつ程度。
▼仕事の依頼がたまたまあったくらい。

無回答	3	3. 1
-----	---	------

◎考察
日常的にコミュニケーションを取れている方が、非常に多い。ただ「その他」の項目に「軽いあいさつ程度」などの回答がある。コミュニケーションの質には個々に差があるかもしれない。また「顔を知っている程度で…」の回答も多くなっている。「日常生活の支援…」に関する詳細は別紙にて。

問 12. ⇒別紙

問 13. 隣近所（町会）の方と気軽に交流ができる機会があったら、参加したいと思いますか。（該当するものに○印を）

選択項目	回答数（個）	割合（％）
積極的に参加したいと思う	8	8. 3
内容によって検討する	61	63. 5

→このうち、ここに回答し、質問文上の「気軽に」に○印をつけた方1名。

参加したいと思わない	15	15. 6
分からない	8	8. 3
無回答	5	5. 2

それ以外の回答
▼既に実施している。（月2回）→無回答の方
▼「26区と」という記述あり。→『（2）内容によって検討する』と回答された方

※（2）（3）同時回答×1

◎考察
「内容によって…」が圧倒的多数を占めており、「積極的に…」は少数の回答となっている。良くも悪くも内容次第で参加率が左右されそうである。
「既に実施している」は、個人的な集まりだろうか。26区は同時につくられた町会のため、歴史も年齢構成もほぼ同じと言える。過去からの住民同士のつながりも、あるのではないかな。

選択質問⑦

問 14. 問 13 で『（2）内容によって検討する』と回答された方にお伺いします。
仮にどのような内容なら、参加したいと考えますか。（該当するものに○印を）※複数回答可

【 [] 】の中の数値は、全回答中『（2）内容によって検討する』と回答した方以外の回答数】

選択項目	回答数（個）	割合（％）
平日に実施	5	5. 2
土・日・祝日に実施	9	9. 4
1カ月に1回程度の実施	7 [1]	7. 3
2～3カ月に1回程度の実施	15 [1]	15. 6
1年に1～2回程度の実施	23 [1]	24. 0
出入り自由など、時間の融通を利かせやすい	17	17. 7
子供と一緒に連れてきてても良い、または一緒に参加できる	17	17. 7
お茶会、または食事会	12	12. 5
アルコールが楽しめる	9 [1]	9. 4
アルコールが無くても楽しめる	13	13. 5
簡単なスポーツ、ゲームでレクリエーション	15 [1]	15. 6
ゲストをお呼びする（音楽鑑賞など）	13 [1]	13. 5
その他	1	1. 0

▼公民館のサークル機能で可能なものがあれば良いかもしれない。また、個々の住民（高齢者）の特技を把握していれば、役に立つ機会があるかと思う。そういう会を企画すべきだ。

無回答	4	4. 2
-----	---	------

それ以外の回答
▼（○印とは別に）△回答→（8）（11）（12）に1つずつ。
▼「平日でも良いが・・・」という記述→『土・日・祝日に実施』に○印。

◎考察
「1年に1～2回程度…」が最多。それに「出入り自由…」「子供と一緒に…」が続く形である。数多くの企画は難しい。また、気軽に参加できるような工夫が必要と言える。町会の活動に対する負担感あるか。「その他」における回答のように、公民館サークルや住民の特技を活用するのも考えたいが、調査が別途必要である。

選択質問⑧

問 15. 問 13 で『（3）参加したいと思わない』と回答された方にお伺いします。
その理由はなんですか。（該当するものに○印を）※複数回答可

【 [] 】の中の数値は、全回答中『（3）参加したいと思わない』と回答した方以外の回答数】

選択項目	回答数（個）	割合（％）
興味が無い	10 [2]	10. 4
きっかけが無い	0	0. 0
時間が合わない または 仕事などで忙しい	7 [2]	7. 3
知っている人がいない	2	2. 1
現状で十分満足しており、特に不満がない	9 [3]	9. 4
その他	2	2. 1

▼プライバシーの問題。すべうわさが伝わる。
▼子供がいないので、子供向けの行事では全く参加できません。

無回答	1	1. 0
-----	---	------

◎考察
「興味が無い」が最多。「現状で十分満足…」がそれに続く。「時間が合わない…」に関しては、内容次第・やり方次第で参加しやすくなるだろう。「子供がいないので…」の回答から、年代問わずに誰でも参加しやすい企画が求められるか。

問 16. 現在の生活の中で「困っていること」や、「気になっていること」など、ありますか。（該当するものに○印を）

選択項目	回答数（個）	割合（％）
ある	24	25. 0
ない	51	53. 1
分からない	14	14. 6
無回答	7	7. 3

問 17. ⇒別紙

選択質問⑨

問 18. 将来の生活（5～10 年後）を考えた時に、「不安なこと」や「あるといいな」と思うことは、ありますか。（該当するものに○印を）

選択項目	回答数（個）	割合（％）
ある	35	36.5
ない	23	24.0
分からない	29	30.2
無回答	9	9.4

◎考察（問 16・問 18 あわせて）
問 16 では「ない」の回答が最多であるが、問 18 になると「ある」「分からない」の回答が多くなる。比較的、現在の生活に関しては安定しているが、将来の生活を考えると不安になる方が多くなると言える。詳細は自由記述にて。

問 19. ⇒別紙
問 20. ⇒別紙

自由記述質問①

【別紙】

25 区町会に関するアンケート調査 集計結果（自由記述）

●自由記述より分かること。
◆最も多かった回答は「周辺施設も含めた住環境の良さ」であった。（問 5）
◆ゴミ当番の代行と、子供の送迎や見守り・一時預かりを隣近所で実施している。（問 12）

◆その他、25 区町会住民の主なニーズと考えられるもの。（全体より）

- 高齢化の進行
 - 個人の健康面・生活面。（除雪作業含む）
 - 非常時に助け合える仕組み。
 - 町会の役員を担えなくなる方が増え、若い世代の負担が増える可能性。
→隣組の再編や役員選出基準の検討。（高齢化と、隣組間の人口・世帯数のバラつき）
- 町会活動や町会役員への負担感
 - 特にゴミ当番に関する記述多かった。
 - 町会役員に対する負担感も多い。上記 1 の(3)と関連するところも。
- 身近な住民との交流・つながり
 - 高齢化の進行や非常時対応などを踏まえ、住民同士の交流を求める声が一定数。
 - その一方で「適度な町会行事、近所付き合いで良い」「フライングに配慮してほしい」などの声もある。

問 5. 「25 区町会」を居住地として選択した理由はなんですか。（自由記述）

◎住環境の良さ×4 1
▼周辺施設の利便性（役所、病院、駅、スーパー、銀行、郵便局、学校、保育園、松本 IC）。×2 3
→このうち「商業施設等も、当時はそこそこあった。」×1
▼静かな生活ができるため（静かな町並み、静かな良い場所、車の通行量少ないなど）×5
→このうち「老後に選と考えた」×1
▼通勤しやすい・仕事先に近い。×5
▼松本市内に近いこと。×3
▼日当たりが良い。
▼あまり面倒な近所付き合いがなさそう。
▼団地内の道路も他地域と比べて広く整備されていた。
▼小中学校に子供多く、とても活気がある。
▼砂ぼこりが舞ってくることが無い場所であったこと。

自由記述質問②

◎土地・家屋の条件×1 8
▼土地の価格が安かった。手頃だった。×7
→このうち「松本市内の中でも安かった。手頃だった。」×3
▼その他、条件が良い中古住宅があった（自己所有、土地の広さ、たまたま通りかかって気に入った、2 世帯に合う分譲地があった、信州に転居した際、初めて住んだのが坂田だった等）。×5
▼土地と家を紐が当たったから
▼分譲していたため。
▼土地が空いていたため。
▼25 区で中古の一軒家を買ったから。
▼家族から土地の半分を譲り入れた。
▼公園なので。

◎家庭の事情×1 0
▼実家との距離が近い、適度である。×3
▼親が建てた家であるため。×2
▼前に住んでいた家に近いこと。
▼坂田に親戚がいた。
▼坂田が家族の出身地だった。
▼親戚の紹介
▼家庭の事情で松本市内から転居してきた。

◎長野県との関係×3
▼長野県供給公社の抽選で当たったため。
▼他県から移り、自宅が無くて探していた時に公社が募集していた。
▼土地を探していた時に、県が売り出している広告を見た。

◎その他×1 1
▼特になし。×3
▼たまたま 25 区だった（分譲地が空いていた）。×4
▼地域性は特に考えていなかった。
▼色々な条件が合ったため。
▼松本から引っ越し、松本市内の会社寮から不動産紹介された。
▼若地として紹介していただいた。

※無回答×4 1

問 7. 問 6 のように回答した理由はなんですか。（自由記述）

（1）満足
▼周辺環境の利便性。×3
▼全国転動のため様々な地域に居住したが、当所は他と比べて景色なく良い地区と言える。

自由記述質問③

▼長く住んでいると都。
▼自分たちで初めて買ったから。
▼住民同士の助け合い・協力が自然な形で成立している。
▼まだ住み始めたばかりで、特に何の問題もないため。
▼大変な行事などが少なく、負担が無い。
▼静かな土地。
▼うるさいことを言う方が、あまりいないと思う。
▼近所付き合い。
▼同世代の人が多い。（→70 代の方の回答）
▼自然も残っているし、散歩途中の人々も穏やかで安心できる環境だと思つたため。
▼不満と感ずることが無い。
▼小中学校に子供多く、とても活気がある。

（2）やや満足
▼周辺環境の利便性。×3
▼行事・町内活動の量が適度である。×3
▼静かな環境。×2
▼特になし。
▼ご近所の方々、昔から知っている方たちばかりでとても親切。有難いこと。
▼近所の方々が快く挨拶してくれる。
▼特に騒がしいわけでもなく、平和に暮らすことができていたから。顔見知りの人も多く、近所付き合いも活に
ならない。
▼近所付き合いが近からず、遠からず、ちょうど良い距離感。
▼隣近所あまり関わりなく、あいさつ程度で楽で良いと思う。お互いに当たらず触らずといったところ。
▼事なかれ主義の雰囲気。
▼自分が高齢になった時を考えると、不便を感じる。
▼掃除やゴミ当番などが多い。組長会議が土曜日の一番家族と過ごしたい時間帯にあるなど、今どきのライフスタイルに合っていない。ゴミ当番こそいらぬ。掃除の頻度も多すぎる。共働きしているので日曜日は休みだし。
▼ゴミ当番がある事だけが不満。集金してでも防犯カメラを取り付けてみては？
▼組内での地区役員の選出の仕方、各組により人数が違うので、役員が回ってくる回数が違うこと。
▼道路の中が狭い。
▼冬季の除雪作業をしっかりとやってもらいたい。
▼冬季の寒さと坂の多さが少々難点。
▼昔、嫌なことをされた。

（3）どちらとも言えない
▼ある程度、各個人を尊重してくれて、変わり事は良く見てくれる時がある。
▼可もなく不可もなし。
▼松本市内より離れている。
▼新興住宅地であるため年齢層が偏っている。
▼子供のころからの知り合いがいない。
▼周りに気軽に話をする時間が無いし、まだ仕事は今が大変のため時間が取れない。

自由記述質問④

▼波田地区については、やや満足。25区町会については、不満定。
▼特に理由はないが、冬が厳しいこと。特に、除雪に関しては不満を感じている。
▼住民同士の交流の促進・助け合いの促進→以前から必要性を感じていたが、なかなか自分からは動けないのが現状。
▼以前居住していた区と比べてしまうが、人との関わりが少なく思えるから。新しい地区の特徴なのかもしれないが・・・。
▼勝手口に置いてあったサンダルが切られていたため。

(4) やや不満
▼役員が多すぎ。
▼中心地に遠い。
▼市の道路の雪かきがない。
▼町会のまとまりが欠けている。
▼新しい家も多くなり、若い人も増えている中、月1で必ず役員会を行ったり、町内清掃で集合場所にみんなを集めたり、旧暦を何十年も踏襲している。もっと革新的になってほしい。
▼自主防災費(毎年500円)を納入しているが、防災訓練が実施されていない。
▼町会の様子が分からない。町会便りの発行を希望。
▼最近はかなり改善されたが、以前は規則が厳しすぎた。

(5) 不満
▼隣、住民同士のコミュニケーションが少ない。
▼店がない。
▼若者がいない。

(問6無回答)
▼周辺環境の利便性。

※無回答×53

問12、問11で『(5) 日常生活の支援(ゴミ出し、掃除、車での送迎、子供の見守り等)をしてくれる人がいる』と回答された方にお伺いします。
それは実態に、どのような支援ですか。書ける範囲で教えてください。(自由記述)

◎子供に関すること×6
▼少しの間、子供を見てもらえる。
▼学校から帰ってきて、そのお家で安心して見てもらえる。
▼用事がある時に子供を一時的に預かってもらう。
▼車で子供の送迎。
▼小学校の下校時に見守りをしてくれる。
▼子供の見守り？(問11の選択肢内に○印あり。この質問には無回答)

自由記述質問⑥

◎その他×5
▼経済・大地震対策。
▼保育園が多いわりに、保育園の募集人数が少ない。これだけ家が増えて子供が増えているのにおかしいと思う。
▼空き瓶回収を月2回にしてほしい。
▼緑のふん(しつけの問題)

※無回答×1

問19、問18で『(1) ある』と回答された方にお伺いします。それはなんですか。(自由記述)

◎高齢化×25
▼移動手段(車の運転、運転免許返納)への不安→運転、買物、ゴミ出しなど困難になる。×6
▼健康への不安。それによる生活上の不安(身の回りのこと、老々介護、誰に頼ればいいのか、子どもは当てにできない、隣近所にはお世話かけられない等)。×6
▼1人暮らしに関する不安(跡継ぎがいらないことも含む)。×3
→このうち『(3) 分からない』と回答した方が1名。
▼金銭面(年金がもらえるか、など)。×4
▼家の維持管理(子供が家に入る様子なし、孫に使ってもらいたい等)。×3
▼これから高齢化が進むと何が起きるか分からない。

◎除雪作業×2

◎ゴミステーションに関するもの×2
→このうち「高齢者には遠いため、1か所から2ヶ所に増設」×1

◎町会役員×8
▼住民の高齢化に伴う町内役員の不足。×4
→このうち「清掃や献当番もできなくなる」×1
▼町会役員の選出方法(現行の輪番制)に関して。×2
→組によっては「高齢のためできない」という方も出てくると思われるので、方法を変える必要あり。
→半強制的のため、個人の考えが伝わりにくい。
▼役員の経験はあるものの、夫婦とも仕事をしている。役員によっては昼間の会合があるようだが、そこには参加できない。
▼役員の負担がどのくらいなのか分らず不安。

◎地域の身近なつながり×5
▼若者男女間わず交流できる場があると良い。
▼若者の近所との付き合い方。
▼高齢社会が温み、近所との付き合い方や助け合い。

自由記述質問⑤

◎その他
▼「ゴミ当番」の代行。(仕分けのための器具の準備などはできないので、同じ組の方のご厚意により代わってもらっている。)

※無回答×1

問17、問16で『(1) ある』と回答された方にお伺いします。それはなんですか。(自由記述)

◎高齢化×9
▼体の不調(持病、投薬という回答も含む)。×3
▼除雪。×2
▼(老夫婦2人での生活のため)従来の生活上の不安と健康上の不安。
▼運転免許証を返納した場合、その生活に関する不安。
▼後継ぎがいらない。
▼相続。

◎一斉清掃・ゴミ当番×6
▼回数が多くて、体調が悪くても出なくてはならない。春1回、秋1回ぐらいにしてほしい。シルバーセンターへの依頼も考えて欲しい。年寄りばかりではなく、今の時代は若い世代も大変。
▼一斉清掃の参加。
▼ゴミ当番を担うことができず、同じ組の方に代わってもらっている状況。
▼ゴミ当番がある事だけが不満。集金しても回収カメラを取り付けてみては？(問7の記述の通り)
▼早朝のゴミ当番。×2
→このうち「高齢になってからできるか分からない。鍵開けの時間を柔軟にしてほしい。」×1

◎町会役員×4
▼選出に関する。×2
→組の軒数が少ないので、役員決めでもめる。
→高齢世帯が増え、地区役員ができない世帯が増える。若い世帯に負担が増える。各組内でも年齢の差があるが、それを解消して欲しい。
▼役員を経験していないので、どのくらいの負担になるか分からないところ。

◎地域の身近なつながり×5
▼新しく転入してきた人たちの交流の場がなく、どこの隣組の人か分からない状況。同じ町会に住むのに、名前も分からないのはいざという時、把握も難しい。
▼隣近所でのこと、どこまで目を突っ込んで良いのか分からない。(→困っているときに、すぐに声をかけられたらと思うが、お節介りかもしれないと思ってしまう。)隣の方は何をしている方なのかずら、不明。
▼隣組に参加していない方との接し方はどのようにしたら良いか？
▼個人情報の縛りが強すぎて、立ち入られる範囲が制約されている。
▼回答の目につくのが遅く、終わった内容が重くことがある。地区で行っていることで知らないことがある。

自由記述質問⑦

▼25区全体の催しではなく、組ごとに催しがあると隣近所の方々との関係も深まるのでは？区全体では、知らない方が多く、新しい入居者は参加しにくいと思う。
▼(子供は県外居住のため)高齢者同士の助け合い。災害時でも、病気で。

◎その他×13
▼経済・大地震対策。長野県民は否気だと思う。大地震→経済崩壊→食糧危機。
▼今のまま一軒家に住み続けるか分からない。
▼子供の学費について。
▼気軽に行ける場所。
▼運動できる施設が近くにあると良い。
▼子供もこのままこの地で生活をしていけるのか？
▼25区の街灯が暗い。子供たちが夜間帰宅するには怖いと思う。
▼25・26区と一緒にしてはどうか。人も少なく世帯数から一緒にしても問題ないのではとも思う。
▼アイシティが無くならないで欲しい。
▼商業施設、大型ショッピングセンター。
▼コンビニ。
▼波田の図書館がもっと人の集まるカフェのような図書館に生まれ変わってほしい。
▼子供の人数が多いので、小学校のクラスが無理やり人数入れている感じだと聞いた。

問20、その他、全体を通してご意見・ご要望などがございましたら、ご自由にお書きください。
(自由記述)

◎高齢化×5
▼老々家族が増える中、安否確認や機づなをどうするか？やらなければならないが、何をどうすれば良いのか、その具体的な策が浮かばない。
▼個人として取り組みたい事・・・①緊急連絡先の一覧表を作成して、同じ組の親しい方、民生委員の方に提出しておく。②子供には定期的に私の住居を見回ってもらう。③子供には定めた時間に電話をさせる。④旅行・入浴等で家を空ける場合は、その旨を近所の方や子供たちに伝えておく。
▼25区、後期高齢者が多くなってきた。
▼今はまだ働いているし、友達も近所に頼しい人もいる。公園に大人も使える遊具(例えばストレッチ)とかあれば、もっと子供と公園に行くと思う。
▼町内内歩いて行ける簡単なスーパーがあると助かる。これから年を取って車運転がままならなくなる可能性があるし、デリアアに行くには良いが、乗りは返還なので大変な気がする。買物代行や病院などの個人予約できる安価な白タクシーはダメだが、そのようなものがあると便利だとは思う。

◎町会役員・隣組の編成×6
▼隣組によっては高齢・少人数で負担大となっている。また、新しく転入してきている組は、その倍近い人数(世帯)となっている。組の再編成を今にこだわらず実行していく必要あり。早急に！
▼負担感のない役員の選出。
▼組長会議の頻度が多すぎる。土曜日は×。

自由記述質問⑧

▼隣近所の方々が高齢になってきており、夫婦のみの世帯が多くなってきて、役員を決める時は必ずしもめこになってしまふ。軒数もかなり少ないので、その点でも役員が回ってくる時は決めるのが大変。どの組でも高齢の方が多くてきたので、役員をする条件など、少しは決める事などあっても良いのかなと感じる。

▼近年、町会の役員の数が多くなっているように思う。この25区も高齢化が進んでいて、役員の担い手も少なくなっている中、「若い人だけでまわす」ということも難しいことだろう。市全体の課題として考えていく時期なのではないか。

▼子供もいて仕事をしているので忙しく、役員が回ってきたことを考えると、とても不安に思っている(役員の仕事や会議の参加ができるか)。役員の仕事が負担の大きいものはやりたくない。とてもこなせないと思う。夜、子供に留守をさせて会議に行くのも子供と一緒に出席することも、現実的ではない。それぞれのご家庭で色々な事情があることは想像しているが、区の行事や朝掃除に出ることも、とても困難な状況。

◎一斉清掃・ゴミ当番×4

▼掃除の頻度は減らしてほしい。

▼ゴミ当番の必要性はあるのか?

▼意味のないプラスチックの〇〇当番は廃止するべき。

▼ゴミ捨て場の鍵がかけにくいと感じた。

◎町会行事×2

▼地区で行う行事など、引っ越してきたばかりでも参加できるよう分かりやすくして頂ければ、近所との交流もしやすくなると思う。

▼25区唯一の区全員の集まりとして、7月の夏祭りがあるが、広い年代で参加してるので、今後も是非継続して欲しい。

◎地域の身近なつながり×4

▼元々ここは新興住宅で、色々なところから集ってきた住宅団地。他の古い町会は先祖代々から住んでいる方が多いと思う。そのためお祭りなどはなく、お宮に入っていない。(入れてもらえなかった?)しかしそれも過去のこと。最初から秋のお祭りとかがあったならば、もう少し若い人も若きも隣近所が関わりあってコミュニケーションできていたと感じる。

▼プライバシーにあまり踏み入りは好まない。

▼地区内のコミュニケーションがあればいいなと以前から感じていた(方法が分かりませんが・・・)。希望としては、アルコールに頼るのはやめた方がよい。酒を飲んで騒ぐだけでは逆効果。→「若い人たちはあまり酒を飲まない」と聞いている。」「子供たちにも対応していくためには、検討の余地大。」はじめはコミュニケーションの促進。将来的には色々な行動に発展させて頂ければ有難い。大変な作業だと思いますが、表記の地域づくりを是非お願いしたい。(区民の協力も当然ですが)

▼既存生活者と最近居住した若い人達との交流を多く持って、色々な考え方を集約し、新しい考え方を取り入れながら、昔からのやり方も残せるものは残していければ・・・できるだけ若い人の意見を取り入れていった方が、これからは良いと思う。

◎その他×13

▼年齢層の偏りにより不活性化。

▼大地震は間近なので、連絡の仕方などもう1度見直す(外出者が多いので)。火災に備えて、消火栓の使い方は世帯主が具体的に体験できるようにしないと、いざという時に使えない。(私も知らない)

自由記述質問⑨

▼人が減っていたり、生活スタイルが変化しているのでも、町会の在り方も変化が必要。これまでも維持しようとするが無理が出る。

▼松本市及び波田地区、町会の話が分からない。

▼大きな災害もなく、住みよい波田である。

▼これから未来を考えた町会。子供、若い世代が元気な町会＝高齢世代が元気な町会。

▼今のところ、特になし。

▼年齢の差、生活の差、色々な「差」をどのようにして埋めていくか。子供の世代が住みやすい地域であってほしい。

▼人生泣いて暮らすも一生。笑って暮らすも一生。おかげさまで、私、近所の方々に親切にして頂き、残り少ない人生、自分に優しく厳しく元気よく頑張ろうと思っている。

▼昔から色々な知人に「波田ってどんなところ?」と尋ねられるたびに「松本の田舎調子ですよ。」と答えている。夏はスイカの名産地。秋はリンゴの名産地。支所前広場を開放して、国道を走る多くの観光客を取り込んでいくべき。学校も病院もとても活発に発展すべき。少子高齢化が波田地区にも来ているので、多くの若い移住者に積極的に働きかけては。量産の「スイカの名産地」を毎日流したらいいか。アイシティとツルヤには毎日のように出かけている。

▼上高地線の運賃高すぎて1度も乗っていない。何年先でもいいからJRにしてほしい。

▼市立病院。早く建て替えてほしい。(空地でなく、運動広場、波田駅もあり、スーパーもあるので、今の場所が良いと思う。)

▼一部、以前にも調査した項目があるが、以前のものはどうなったか。

(※奥原補足。社章の1人暮らしアンケートのこと。一部の項目を参考にさせて頂いていました。)

脚注

- 1) 中田実監修・東海自治体問題研究所編「これからの町内会・自治会 いかにあいのまちづくり」1995, 自治体研究社, p.17
- 2) 中田実編「町内会・自治会の新展開」1998, 自治体研究社, p.22
- 3) 山崎丈夫「地域自治の住民組織論」1998[改訂新版第2刷], 自治体研究社, p.39
- 4) 前掲 中田実1998, p.51
- 5) 前掲 中田実1998, pp.51-52
- 6) 前掲 山崎丈夫1998, p.2
- 7) 前掲 山崎丈夫1998, p.14
- 8) 前掲 中田実1998, pp.105-106
- 9) 前掲 山崎丈夫1998, p.22
- 10) 山崎丈夫「地縁組織論—地域の時代の町内会・自治会。コミュニティ」1999, 自治体研究社, p.3
- 11) 前掲 東海自治体問題研究所1995, p.62
- 12) 前掲 山崎丈夫1998, p.28
- 13) 前掲 中田実1998, p.26
- 14) 前掲 山崎丈夫1998, p.155